
大空キャンバス

ルガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大空キャンバス

【Nコード】

N2502Y

【作者名】

ルガー

【あらすじ】

俺、伊藤雄飛は平凡な高校2年。そんな俺は中学の頃から憧れている女子がいた。その娘は学校のマドンナで俺にはとても届かない存在…。平凡な存在の俺はマドンナの心を射止められるのか!?

俺と好きな人

時は秋。

食欲の秋、読書の秋、運動の秋、芸術の秋、星野秋、それから恋愛の秋…

…おっと、リア充爆発しろ発言は禁止だぞ。

まあ、別に考えてみれば恋愛は秋じゃなくても関係無いね。

早速だが俺は我が【モテない男子】の憧れ 大城 結依 という女子に恋心を抱いている。

成績優秀、性格マジ天使、美人でそして可愛い、身体細い、髪はロング、髪ロング↑ここ重要

恋心を抱かない方がおかしい！

むしろ、抱かないやつはホモだといっても過言では無いと思う！！

俺と好きな人（後書き）

初心者で誤字、脱字などありますが温かく見守ってさい！

俺と自殺エース

冷たくひんやりとした風に誘われて俺、伊藤雄飛は屋上へと昇った。

あ、雄飛って名前珍しいだろ。

なんでも父親が野球選手にしたかったみたいでさー

あの某スポコン漫画の飛雄馬ね。あの馬を消して逆さにしたらしい
おー

もしも俺が飛雄馬なんてDQNネームだったらなんて想像するとゾ
ツとするな…

そしてその名前でA R I N A G A R A

俺は帰宅部だ。しかも野球なんてやったことないんだなこれが。

制服を通して伝わる寒さに肩を震わせながら東京の下町を一望して
みる。

…むっ、あそこの店に長蛇の列ができてるな！あそこは…って！俺
の家ジャマイカ！？

俺の父親は焼き鳥屋やってるんだけどさ、どうしたんだよ！？もう
かってるのかよお！？

ふと、屋上にある時計を見るとチャイム3分前だった。やべ、戻らないと…

ドアに向かって歩くと、長身で丸刈りの男がドアを開けて出てきた。

えっと…確か野球部のエースの浦田？今年は初の甲子園にも導いて…えーと、ベスト4ぐらいまでいったんだっけ？ちなみに俺は仮病を装って応援にも行かなかった。

浦田の顔は青白かった。手には白い封筒を手に入っていた。

俺は威圧感たつぷりの浦田に顔を背けながらドアへと向かった。

二人が交互にすれ違う瞬間だった。

俺は白い封筒に【遺言書】の文字を見逃さなかった。

…浦田？お前まさか‘自殺’でもする気なのか！？

「おいっ！浦田ああああ、早まるなああああああああああ
ああ。」

自然と俺の口が開いていた。

「え？」

浦田が返す。

「まさか甲子園で優勝できなかったのを自分の責任だとも思っているのか？

まだ2年だろ！来年、頑張ればいいじゃないか！早まるなああああああああ！！！」

よっしゃ、カツコいいぞ俺EEEEEEEE！！！！

「おい…確か伊藤…だよな？お前、何言ってるんだよ？」

「何って…隠そうとするな！その手に持っているのが動かぬ証拠！」

「これ…？ああ、朝、俺の下駄箱に入ってた。」

「もつとまともな嘔吐けよ、んな訳ねえーだろ！見せてみる！」

渋々といった感じで浦田が差し出す。

【浦田 竜太郎君へ

へへビックリしたでしょう、浦田君を驚かせたくってw
私、2組の渡瀬って言います。以後、お見知りおきを…。
実は私、昔から浦田君の事が気になっていました。

覚えてますか？あの春の入学式の時です、浦田君は…】

うん、こんなの置いて死ぬバカいないね…

恥ずかしい、すげえ恥ずかしい、体中が熱い、もう頼むからどっか
行ってくれ…

「それに自殺の場合は【遺書】だろ？」

浦田が笑いながら言った。

俺と昼飯

あと…あと1分！あと1分！あと1分！あと1分！

何を待ってるって？あと1分で4時限目が終わって昼飯なんだよっ
！！

食堂で焼きそばパンを買わないといけない！

焼きそばパンは結依みたいな存在だ。

他にも狙う飢えた獣がいる、その中で俺は勝ち抜かなければならな
いっ！

その時だった！チャイムが鳴った！日直が起立を促す。

「礼」

俺はその刹那、廊下に向かって猛ダッシュ！…しようとした時に声
がかけられた。

「伊藤君。」

おい！誰だよこのKYは！？しかし、すぐに分かった。
決して大きくないが耳によく透き通る声で甘く、優しい声。

——
結依だ。

こりゃ、無視して焼きそばパンに向かうなんてできないな。

「…あ、なんすか…。」

おい！俺エエエエエ！！もっと声出せよオラアア！！

「一昨日休んだね？社会のノート写した？」

「いや、うつつしてない…。」

「じゃあ、これ貸してあげる。」

「あ…ども。」

天使みたいだ！いや、天使だ！うわああ！！可愛ええええええええっ！！！！

「いや、天使っているんだな。」

「大丈夫かお前？」

同級生の鳥越と昼飯を共にしていた。
鳥越は野球部に所属している。性格を一言で言うとチャライ。そして、エロい。俺もだが。

「そつえばさ、浦田がさ、遺言書という名のラブレター貰ったぜ」

メロンパンを頬張りながら話す、え？焼きそばパン？んなもんどーでもいいだろ今は！！

「なんだそれ、あいつはモテるからな。お前と違って。」

「ふん、女子からノート貸してもらったんだから俺だって。」

「誰の？」

「大城さんの。」

「ああ、脈無しだな。諦めろ、お前じゃあ生きてる次元が違う。」

「…次元ねえ。」

「島広がジローを獲得するようなもんだな、確率は。」

「…それ無理やん…。」

俺と席替え

運命の日キタ

(。。。)

!!

そうだ、席替えだ。俺にとってはドラフトみたいなものだ。

しかも、あれだ！

うちのクラスの席替えはなかなか複雑でな…

1 まず無記名投票で「班長」を決める

2 班長が副班長を指名する

3 班長・副班長と教員が、話し合って、班員を決める

あれ…全然、複雑じゃなかったね…

さて、俺は鳥越にでも入れておこうか。

結依は普通に班長になれるだろう。だって結依だもの。

この天使と同じ班、願わくば隣の席になってやる！神様マジ頼む！

結果、結依は班長にケッテイ、なんと鳥越もトーセン。

鳥越は何故か満面の笑みだ。憎たらしい顔をしておる…。

あれ…待て…？鳥越、俺を副班長に指名しないよな（…）

どうやら、票の多い順に副班長を指名して行く事に決まったようだ。
まずは生徒会長でもある天野が発表する。

「伊藤…」

Σ（。D　うわああああああああああああああああ

「真由華さんで。」

セーフ！！（。＊）（（（（＊。＊）セーフ！！
冷静に考えてみると俺は副班長を任される人脈は無かった…

さて、続いて天使である大城結依だ。

親友の笹岡かな、男子はやめてほしい。俺が精神的にガックリくるわ。

手に汗を握る中、教師は結依を教師は見つめていた、おい！YA

ME RO

俺は教師にZA KIの呪文を唱ええていると…結依はこう放った。

「伊藤雄飛君で」

「むはっ！！！」

キタ

（。。）

！！なんかキタ

（。。）

！！

… 周りの反応は酷かった。

「大城さん、やめた方がいいよ！」

「伊藤氏ね」

「うわあああああああ」

「ぎゃあああああああああ」

俺と下ネタ（前書き）

苦手な方がお気を付け下さい。

俺と下ネタ

呻き声が教室を反響させていた。

副班長の指名の後も俺に送る、負け組男子諸君の殺気が酷かった…
まったく未練らしい負け犬たちめ。お前らなんか俺の結依を渡すかこの野郎！！

「伊藤君」

一瞬、まさかDQNのカツアゲかと思ったが違った。天使だった。

「…あ…あ…な…何…すかあ？」

何照れてるだ俺、もう少し大胆にいかねえーと…

「班員どうする？」

そうか二人で相談して決めるのだった！チャンス到来！！

ここで、なんでもいい、どーでもいい、シラネ、はタブーだよなあ…
大胆に…慎重かつ大胆に！アタックチャ〜ンス！！

「俺は大城さんと二人でいいと思う。」

… あ、アグレッシブすぎたあああああああΣ（。D

「え…えつと」

結衣は顔を紅葉のように紅くした。

… あれ？意外と成功な感じ？

ここからだよな、どんどん攻めてやる。下ネタでも言っちゃまうか…？

下ネタ…下ネタ…

あれ？あれ？あれ？あれ？

下柳剛（前阪神タイガース）しか思いつかねえええええええ
確かロツテが獲得の意向らしいけど、いやいや、こんなのどーでも
いいんだ！！

えつと、下ネタ、下ネタ…

「野球やらないか？俺のバットとボールで」

「野球やらないか？君のブラックホールにホームラン打ってやる。」

それも場外（キリ）」

「野球やらないか？観客はクラスメートだ。」

「野球やらないか？俺の試合は激しいけどね。」

ダメだ！まず野球からH A N A R E R O

「二人じゃダメだよ。」

結衣が少し笑いながら言った。

はい、知ってますよ。僕ら含めて6人ですよ、知ってますよ。

えーっと何て返さばいいんだ？下ネタ…うーん

いや、待て待て待て待て待て待て待て待てっ！！！！！！

なぜ俺は下ネタを考えているのだ！？

こんな清楚な女子が好きなわけがあるまい！

いや、案外好きかもしれない…そっちの方が嬉しい気もする…

どうなんだ？どうなんだ？どうなんだろうか？

「下ネタ好きですか？」

ぬはああああああ俺えっえええええ何聞いてんだああああア

アアアアアア

「…嫌い…かな。伊藤君も嫌いっぽいよね。」

「い…言う奴とか最低ですよね。」

「私もそう思う。」

伊藤雄飛^{いとうゆうへい}高校2年生。

絶対に今日から下ネタは言わないと決めた日だった

俺と班員

おつす、オラ伊藤雄飛^{いとうゆうひ}！

我が高校の天使である女子、大城結依^{おおしろゆい}と同じ班を勝ち取ったぜ！

しかし、今でも下ネタが脳内でグルグルと回っているこの頃。

「伊藤君？」

ぬはっ、天使！！！下ネタなんて考えてねえーっすよ！！？

「班員っすよね、班員班員」

「どうして伊藤君って敬語なの？タメ口でいいよ？」

タ…タメ口？俺が結依に、天使にタメ口いいいい！！？

これは千載一遇のチャンスだぞ。落ち着け俺、俺、落ち着くんた俺
落ち着け俺落ち着け俺…

なんか落合博満とオレ竜という単語が出てきたああああああ。

なんで野球が出てくるの？さっきの下柳のせい！？ねえ、なんなの
！？死ぬの！？

「気分悪いの？」

「いや、大丈夫ですう！！」

「またタメ口…」

「大丈夫だ結依！！」

あれ…ちょっと凄い事言っただような…？俺…結依って呼んだような…

「それで伊藤君、班員だけど苺ちゃん入れていい？」

…エ、まさかのスルー？

2人の時は結依って言わせてもらおうかな…へへへへへっ）。
???????ニヤリ

まあ、そんなチャンスは滅多に無いだろうが。

さておき結依はやはり笹岡を1位指名か。

あれ？俺が1位じゃね？あれ？俺1位？憧れの天使が俺を1位指名…！！？

「そつえばどうして僕が1位指名なんで…だったんです…だったの？」

「…。」

天使は顔を少し上に上げた。なんか考えているっぽいな…

「伊藤君ってさ、面白いじゃん」

キタ (。 。) !! なんかキタ

!!

(。 。)

嬉しい…超嬉しい！俺もういつ死んでもいいよ！！

結局、結衣の親友である笹岡に加え女子では不登校気味の渡瀬。男子では外国人のマイケルに加え、東野が選ばれた。

DQNやリア充がいなかった今回の席替えは100%と言っても過言では無い。

次は席順決めだった。

当たり前かのように渡瀬、笹岡、結依と即決した。

「エート、イトウツテタシカ、メ、ワルイヨネ。イチバンマエデキマリダヨナ？」

マイケルだ。氏ねばいいのに…、しかし反論出来ない。視力悪い…

「待つて、俺の方が目が悪い。俺を一番前にしてほしい。」

東野だ。眼鏡をキザらしく上に上げた。

GJ東野オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「ソウデスカ、ジャア、ワタシ、イチバンウシロネ。」

は？バカなの？死ぬの？

っていつか俺が副班長だぞ！？なに仕切ってるんや！！俺が結衣の隣なんだ！！

「マイケル君の方がいいじゃない？」

S A S A O K A あああああああああああああああ

「うーん、伊藤君かなあ」

結衣が僕の方を見て言葉を発した。

キタ （。　。） ！！

信じてたよ結衣
いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いい

俺と百合

「いや、天使っているんだな。」

「昨日もお前の開口一番それだぞ。大丈夫か？」

今日も俺は友達の数なくて人望も薄い鳥越と昼食をとってあげていた。

ちなみに今日は母さんが大変珍しく弁当を用意してくれた。やっぱり焼き鳥…orz

「ああ、これが天使の愛の弁当だったらいいのに…」

「その天使って大城だろ。」

Σ（「口」111）

「だだだだ誰だよ！？どのおおお大城だ！？」

「だから大城ゆ…」

「ア——————ッ」

「大城ゆ…」

「あれだろソフトンバンクを戦力外になった大城だろ!!」

「落ち着けよチェリーボーイ。」

「落ち着いてますけど!?!? すごい落ち着いてますけど!?!?」

「あいつは無理だと思うぞ。」

どうせ俺のルックスじゃ無理だと言いたいんだろオラ。

「伊藤…噂によると…あいつは…」

…エまさか彼氏がいるのか? DQNの彼氏がいるのか!?!? そうなのかああ!?!?

「笹岡と付き合ってるらしい。」

S A S A O K A ?

え、あれって女子じゃないの? あれ、まさか大城が男? いや笹岡が女…?

「GL!?!?」

「らしいよ、残念だったなチェリーボーイ。」

「ソソソs、ソースは!？」

「ソース? ああ、浦田が言ってたぞ。」

浦田? こりゃ、変なデマ流す輩を退治しないとな…

でも、もしかして本当かも… わあああああ結依
イイイイイイイ

俺と屋上

くそ、あの浦田っていうデマ流す野球部のエースを排除しなければ……！！

リズムカルに駆け上る階段を上る俺、カッコイイ！！

屋上へ行ってみる。あの丸坊主の姿は無い。しかし、俺の天使、結依がいた。

向き合うように人がいた…… S A S A O K A ! ? ぬわああああ
H A N A R E R O

壁に隠れるようにして俺は2人から身を隠す。

クラスの女子で1、2番目に身長の高い結依と

クラスで1番、身長の低い笹岡。その身長から小学生を思わせる。

しかし、どちらとも可愛いっすな……

その時だった。笹岡が結依の肩を背伸びしながら掴んだ。

B O K E エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ
エ エ

ぬわわっわああああ俺の結依があああああああ

H A N A R E R O ! ! Y A M E R O ! !

結依は戸惑うように目を大きく開いている。笹岡が何か言っている……？

しかし聞き取れない。ただこれだけは聞こえた。

「ねえ……私に譲って？」

何をだああああああああああああああああああああ

唇か！？唇なのかああ！？唇だろ！？唇なんだろおおおおp！？
それとも、もつと卑猥な……うわああああああああああああ
ああああああああ

このままS A S A O K Aの前に結依を百合化させていいのか
！？

いいわけが無い！俺が立ち上がらなければ！！

使命感を胸に立ち上がった時、肩を叩かれた。

鳥越と浦田だった。どちらともニヤニヤと笑っている。

「いやあ、萌えるねえ。」

浦田の顔が歪んだ。声を潜めて呟いた。

こいつ……腐ってる！？腐男子！？

DQNのような顔つきからは想像できない言葉に俺は耳を疑う。

「残念だったな、伊藤。まあ女なんて星の数ほど…」

「…だ」

「ん？」

「こんなの…ダメだ！」

「それは2人が決めることだろ。」

鳥越の声を背中にした。

俺は大きく息を吸った。そして、今…吐き出すんだ！！

「好きだ！！！！！！俺！！好きだああああ！！！！！！！！」

2人がこちらを驚くように向いた。

後ろの浦田と鳥越は想像しなくても分かる。笑っている…

身体が萌えるように…燃えるように熱かった。

そのまま俺はダッシュして階段をリズミカルに降りた。少し、遅れて2人の降りる音が響く。

「待てよ…伊藤。どっちに言ったかあれじゃ分からないだろ!!」

そんな鳥越の声に反応したように俺は

階段から転落した。それも派手に…

俺と笹岡

昼間にぶつけた額をさすりながら俺は帰り道、本屋に足を運んだ。

何を探すかって？あれに決まってるだろ。

眼鏡をかけた細心の店員に聞いてみることにし、声をかけた。

「すみません、レズの彼女をおとす恋愛マニュアル本ありますか？」

本の整理をしていた店員の顔が（＊；。；＊；。；＊）ブツ ↑こ
うなった。

「と…当店では…むふ…そ…その…プツ…扱って…プフ…おりま
…むふ…せん…プフ…」

失礼な店員だ。

「じゃあ、そういう類の本ありませんか？」

「これなんか…これ…むふむふうつうつ…どうでしょうか」

渡された本の題名は【彼氏がいないという女を落とす秘訣（定価

1550円)】だった。

財布を覗く。2000円…俺の全財産…

視線を上にし、笹岡と結依の百合が自然と脳裏に浮かんだ。

「ぬwくあああああちげええええこれtyげええええええ」

店員の冷たい視線で我に返る。

そっだ、違う。結依の笑顔を思い出せ。

本当に天使だ。見るだけで俺は癒され顔がニヤける。

この天使の純白な翼をS A S A O K Aという百合野郎に汚させていいのか!?

——いいわけ…ないだろおおおおおおおお

「うつしやああああ購入やあああああああああ」

「1550円になります」

「あれ?…伊藤君?」

背中をビクッと震わせた。この声は…透き通る声は…だけど結依ではなく…

振り向いて自分の目線より小さい身長で確信させた。

SA SA OKだった。こいつのせいで俺は1550円を...

「お帰り、母。」

センター前ヒットを打たれた投手のように俺はうわ…と振り向いた。眼鏡の男がにこやかに苺に笑みを送っていた。笹岡が「ただいま」と返事する。

「友達？」

眼鏡が光った。目の奥にはこちらを覗く鋭い視線がある。

「うん、クラスメイト。」

落ち着け…俺…考える…ここは…【笹岡本屋店】

くそおおおお、なんで気がつかなかった俺EEEEEEEE
エえエツレ

「何買ったの？」

俺の背中に話しかけているようだ……

「ん…えっとね…うん…相対性理論についての本…」

「（＊；；＊；＊；）眼鏡がこんな顔をする。」

「伊藤君そんなの読むんだ。意外…」

「そうだ、お茶でも飲んでいたら？ いいよね、お父さん。」

そのお父さんという人物にレシートをもらって俺は固まった。

「いいよ。この前にもらった羊羹を出してあげてね。」

「はい、じゃあ伊藤君。こっちこっち。」

$$\begin{pmatrix} \square \\ ; \end{pmatrix}$$

笹岡に腕を掴まれる。 いやだあ ああああ助けてえ えええええ

俺と莓

目の前には緑茶が置いてある。そして、隣に羊羹…そして顔を上げると…
笹岡^{ささおか}莓^{むすび}がいる。顔は…まあ…可愛いかな。俺の天使（結依）には劣るが。

「あ、食べて。食べて。」

ちなみにこの女はレズ…俺のエンジェル（結依）を汚そうとしている。許されない…

だけど、本当にそうなのか？あの情景を見たらどうしても疑ってしまう。

ここはオブラートに包んでレズかどうか聞かなくては…オブラートに…

「オブレズラート？」

「何か言った？」

な…な…なぜ伝わらん！？オブラートに包んだぞ…

ふと、焼き鳥屋を営んでいる父親の言葉を思い出した。

『女の子に何か重要な事を聞くときは、なるべくさりげなく…だ。』

そうだ！さりげなく、さりげなく…

「笹岡さん、大城さんって仲良いよね？」

「うん、小学生の頃からの付き合いだからね」

「そうだ、大城さんって彼氏とかいるのかな？」

その時だった、笹岡の目が怪しく光った。

暫くこちらを怪訝な表情という感じで見ていた、怖いお怖いお怖いお…

「いないと思うけど…何で？」

うわー怒ってるよ…、結依に近づくなってか！？だが、結依は俺の結依だ！！

「なななななんあ……な…何でって何で？」

「好きなんでしょ？結依ちゃんの事」

またしても笹岡の表情が鋭くなった。

目が…目があああ、怖いお怖いお怖いお怖いお怖いお怖いお…

「ま…ま…ま…まあ可愛いとは…思っけど…あのね…あの…」

「伊藤君、今日さ。屋上で言ったじゃん…好きだ”って…あれってやっぱり結依ちゃんの事？」

全てを悟ったように笹岡は無表情のままだった。

時間が重くなったように動かない。そのかわり冷や汗のようなものが出てくる。

「いや…隙。鳥越と相撲してて、隙があつて。隙だ…って…はい。」

「本当の事言つて。」

「本当は好田っていう野球選手がいて…」

「どこのチーム？」

「お…俺の脳内チーム！」

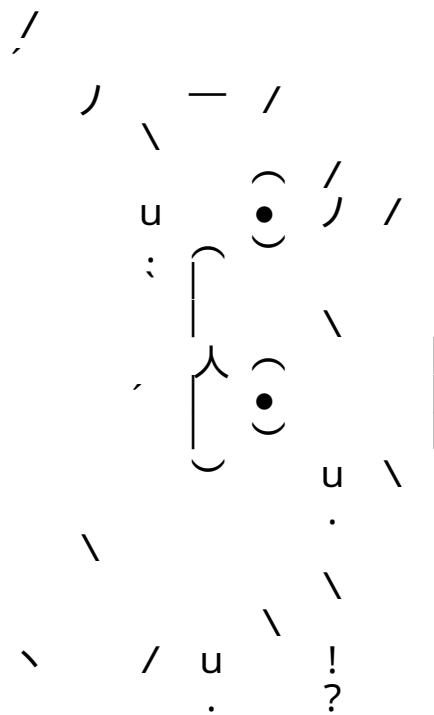
「お願い…本当の事言つてよ。」

泣くような顔で笹岡が言い放った。乾いた唇を潤し、俺は視線をつま先に落とした。

「私ね。高１の時から…」

「
…」

「伊藤君の事、好きだったんだ…」



PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2502y/>

大空キャンバス

2012年1月1日21時53分発行